

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

カリキュラム・マネジメント実践校における
教師の協働の在り方と児童の学習成果に関する
事例研究

A Case Study of Teachers' Collaboration and
Children's Learning Outcomes in an Elementary
School Practicing Curriculum Management

2022年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

守 一介

MORI, Kazuyuki

研究指導担当教員： 尾澤 重知 教授

カリキュラム・マネジメント実践校における 教師の協働の在り方と児童の学習成果に関する事例研究

A Case Study of Teachers' Collaboration and Children's Learning Outcomes in an Elementary School Practicing Curriculum Management

守 一介 (MORI, Kazuyuki) 指導：尾澤 重知

1. はじめに

本論文は、従来とは異なるシステムである「プラン検証システム」(図)によって継続的なカリキュラム開発を実現している館山市立北条小学校(以下、北条小学校)を対象として、システムの核である学年会における教師の協働の在り方と、児童の学習成果として児童の話し合いやリーダーシップ・フォロワーシップに着目してそれらの実態を明らかにすることを目的とする。

近年、「チームとしての学校」を作り上げることを目指して、①専門性に基づくチーム体制の構築、②学校マネジメント機能の強化、③教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備が求められている。このような在り方が求められる中で、「カリキュラム・マネジメント」を核に学校の組織運営を改善・強化していくことが重要視されている(文部科学省 2015)。

しかし、教職は、子どもの実態に応じた教育活動を展開するため不確実性が高く、個人の裁量性に依存して個性化しやすい傾向があり(佐古 2006)、学校組織における教師の協働化に向けては実践的な知見が必要である。

カリキュラム・マネジメントについても、田村ほか(2016)が「カリキュラム・マネジメント・モデル」を検討しており、徐々に取組事例も報告されるようになってきているが、カリキュラム開発を組織的かつ継続的に行う仕組み等については言及されることは少ない。

昨今のカリキュラムは、コンピテンシーベースで教育課程を編成することが世界的な動向となっているが、安彦(2014)は能力の行使を吟味する人格に注目している。本論文においてはこのような人格的な側面に関連する、児童が社会的文脈上で発揮する力に焦点をあてて検討したい。

以上の問題意識に立って、本論文は、カリキュラム・マネジメント実践校におけるカリキュラムを継続的に開発する仕組みを踏まえたうえで、対象校における教師の協働の在り方と、対象校で育成された児童の学習成果についての実践的な知見を得ることを目指す。

2. 本論文の構成

本論文は、次の7つの章によって構成される。

第1章では、「チームとしての学校」という教師の協働やカリキュラム・マネジメントが求められている現状を踏

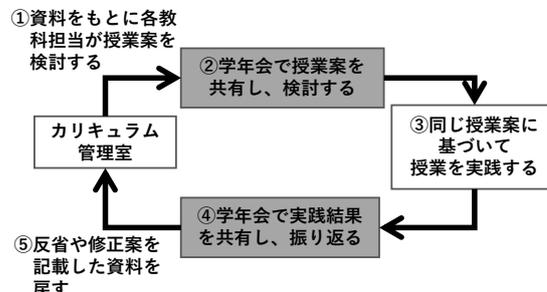


図 プラン検証システム
(野嶋(2012)を元に筆者改変)

まえて、その両方が実践されている学校についての教師や児童の実態に関する研究の必要性について確認した。

第2章では、対象とする北条小学校のカリキュラムやシステムについて記述し、関連する先行研究を示しながら、教師の協働の場としての学年会、北条小学校のカリキュラムにおいて育成の目指されている自治的能力と話し合い指導、また、児童の話し合いの類型化について整理した。本論文では、プラン検証システムの核である学年会における教師の協働の実態と、ソーシャライズされた(野嶋 2015)児童の学習成果について、研究を進めることとした。

第3章・第4章は学年会に焦点をあてた研究である。第3章では、学年会における教師の逐語録のデータをもとに、学年会においてどのような内容が検討されていたかを示しながら、学年主任が果たしていた役割について検討した。結果として、連続する3週の学年会において、全ての教科の計画や振り返りに関する内容が話されていたことと、学年主任の9つの関わり方が観察された。北条小学校の学年主任は、日常的に学年会を運営する中で、提案された授業案の共通理解の構築や意思決定を支援し、実践結果について学年主任の視点でフィードバックを与えていた。さらに、授業の計画と振り返りに資するよう自らの経験を共有し、自他の役割を果たせるよう支援し、北条小学校独自の教育方針に関する共通認識の構築を目指していると考えられた。

第4章では、第3章と同じデータに基づきながら、教師が話し合い指導に関してどのようなことを検討しているかについて、Mercer(1996)による児童の会話の3類型を踏まえて分析を行った。対象とした1年生11月時点では、教師たちが話し合いの指導として共通に目指していたのは、

発言に関連性がなくとも多くの児童が発言できることと、他の児童の発言を聴けることであった。また、子どもたちの中には、教師の働きかけによって他者の発言の言いかえのような累積的会話における発言ができる児童も存在すると捉えていた。そして、北条小学校6年間の話し合い指導を通じた結果として教師たちが捉えている状態は、探索的会話の状態であると考えられた。

第5章、第6章は、児童に焦点をあてた研究である。第5章では、統合学習の最後の単元である「卒業式第二部」の実行委員会において、実行委員児童が実際にどのような話し合いを行っているかを分析した。結果として、Mercerの会話の3類型のうちでも累積的・探索的会話という高度な話し合いを行っているかと判断された。また、卒業式第二部のスーパーバイズを担当した教師の関わり方を分析した結果、教師は主に単元全体の進捗管理と発表内容の質の向上を意図した支援に注力できていたと見なされたが、このことの要因としては、児童が自分たちだけでも探索的会話のような建設的な話し合いができており、その点に関する指導の必要がなかったためであると考えられた。

第6章においては、ここまでの検討を踏まえた質問紙調査の試みとして、自尊心とPM式リーダーシップに関する尺度を児童向けに改作して検証を行った。尺度には一定の信頼性・妥当性が認められ、それぞれの下位尺度を用いて分析した結果、自尊心とPM式リーダーシップの各能力について、極端に自己評価の低い児童は5%未満であった。極端に自己評価の低い児童については注意が必要だが、学校として自尊心やPM式リーダーシップといった態度や能力が育成されている可能性を示唆するデータが得られたと言えよう。

3. 総括と今後の課題

以上の知見を踏まえて、北条小学校の教師や児童の実態について総合考察を行う。通常、カリキュラムをもとに教師が授業を検討し、児童に対して実践して振り返るというサイクルが日常的に行われているが、個業化した学校においては、教師一人一人が個別に行うことが想定される。しかし、北条小学校ではプラン検証システムによって、教科担当教師の授業案をもとにした協働的な検討、共通の授業案に基づく実践、さらに協働的な振り返りを行う機会が学年会において確保されており、第3章で見出されたように、実際に全教科についての検討がなされる中で、学年主任の様々な関わり方によって、学年の教師はそれぞれの役割を果たしていけるように支援されていた。

また、本論文においては、児童の話し合いに着目して、6年間を通じた指導方法と目指す児童の姿がカリキュラム

に記載されていること、1年生の学年会ではその時点の児童の状況や指導方法が協働的に検討されていることが明らかになった。カリキュラムの記載内容や、6年間を通じた指導の結果として教師たちが目指していた状態は、Mercerの探索的会話と同様の状態であった。そして、統合学習の6年生最後の単元における実行委員児童を観察した結果、児童は探索的会話による話し合いによって、実際に建設的な話し合いを行っていたことも明らかになった。このように、カリキュラムにおける記載内容、教師の協働的な検討内容、児童が実際に示す姿が、探索的会話の状態という点で一致しており、北条小学校のカリキュラムや教師によって目指されていた児童の姿は、教師の日常的な協働を経て、達成されていることが示唆された。

以上のように、継続的なカリキュラム開発を実現するプラン検証システムという仕組みをもつことによって、学年の教師が授業に関して協働的な計画と振り返りをする日常的な場面として学年会が設定されていることが、北条小学校の児童が6年生の最終単元で探索的会話による話し合いという社会性を発揮しうようになった重要な要因である可能性を示唆できる。これは、学年会が協働的な計画と振り返りの場であることに加えて、カリキュラムや児童の実態についての認識を学年の教師間ですり合わせる機能も持っている可能性を示唆するものである。カリキュラムに示される児童の目標状態に向けて、児童の状態や自らの実践の捉え方、次にどのような指導をしていくかを学年主任の支援的な役割を通じて調整し、学年としての指導方針を決定していく。この活動が日常的に行われることを通じて、ソーシャライズされた児童の育成につながっていることが示唆された。

本論文の課題として、データが非常に限定的である点が挙げられる。本論文の知見は北条小学校という1校の分析から見いだされたものであり、非常に限定的である。さらに、第3章・第4章は、ある年の1年生を対象としたものであり、北条小学校の中でもさらに限定される。従って、今後は他の小学校における協働化の在り方や、児童の学習成果と比較検証することや、継続的に北条小学校でデータを取り、別の学年集団において本論文の知見がどの程度支持されるのかといった検証が必要になる。また、北条小学校で学年主任を経験した教師が、プラン検証システムのような仕組みのない学校で学年主任となったとき、協働的な関わりは維持されるのか、あるいは失われてしまうのか、といった観点での研究も必要になってくるだろう。